

藤原惺窩の菅神廟碑文小考

藤原惺窩の菅神廟碑文小考

―「関南天満宮伝記」(補)―

藤 本 清二郎

はじめに

2006年度、紀州経済史文化史研究所では、紀州和歌浦天満宮の再建400年を記念し、同社の協力を得て、所蔵資料(古文書・美術工芸品等)を公開し、その価値を同社の歴史に位置づける作業を行った⁽¹⁾。その作業の中で、同社の重要な由緒書である「関南天満宮伝記」を翻字し、紹介したが、その際、紙面の関係で一部を割愛した⁽²⁾。同伝記の中には藤原惺窩の「重テ

建和歌浦ノ菅神廟ニ碑ノ銘」が引用されているが、この部分を割愛した。

割愛した同銘文は、惺窩の業績を顕彰するため、江戸時代前期に翻刻されており、思想史研究の分野では広く知られ、思想形成過程の業績として取り上げられた⁽⁴⁾。近年、惺窩の思想形成の内、仏教から神儒一体化への傾斜の過程を示す重要な史料として注目されている⁽⁵⁾。また江戸中期の元文四年(一七三九)、紀州名高の僧全長が著した『和歌浦物語』の中で同銘文が紹介されており、同書を柏原卓は本研究所の紀要に翻字している⁽⁶⁾。このような経過があり、藤原惺窩碑銘の部分のみ翻字を断念したが、子細に見ると送りがなや漢字に違いがあることがわかった。

そこで、今回、割愛した部分を全文翻字し、紹介するとともに、数本の間の異同や関連を確認し、それによって「関南天満宮伝記」の成立についても若干言及することとした。

一 史料紹介・藤原惺窩「菅神廟碑文」

〔関南天満宮伝記〕所載

重建^テ和歌浦菅神廟^ニ碑銘

於乎、神姓菅、三其字、諱道真、世胄儒宗也、天生岐
嶷多材多芸、幼季章章焉、竟甄拔^{シテ}登三甲科^ニ、屈^ル翰
林^ニ也、在^ニ試局^ニ也、調^{セラル}於右相^ニ也、經術史學之博、
敷奏議論之詳、職業履歷之實、斑^ニ斑^ニ乎遺文殘稿^ニ
矣、百千歲之後^{〔D廟〕}、食^{シテ}於京師^ニ、而祀典肅爾^{〔B肅〕}也、
上^{ニシテ}而王公縉紳、下^{ニシテ}而廝徒負養、信奉欽慕而、不^テ敢止^ニ、
載^テ在^ニ口碑^ニ、不^レ踈^{スル}勒^ニ、彝鼎^{〔鼎カ〕}、何其盛也哉。雖^レ
然、窺^ニ測^{スル}其家乘^ニ、立^テ論遣^ル辭之際、如^レ不^レ免^ニ
雜^ニ駁^{スル}于寂滅之教^ニ、人或疑焉、彼^レ盤^ニ大道^ニ、宜^ク
シ攘斥拒絶之^ニ、不^レ遑^ニ、而慫慂之、若^ニ儒名^ニ何^ニ矣、讒
口嗾嗾^{トシテ}竄^{セラル}紫陽^ニ、都府樓之瓦、觀音寺之鐘、幽鬱
無聊之懷、不^レ可^レ掩矣、蓋素行之學未^{シテ}明、而然^ル乎、

非耶、當時之有^ル識者、詠^ス赤鳥凡^{タリト}、有^ル乎無^{キカ}
乎、不^フ少概見^{ハキ}者^{〔B後〕}奚^{ソヤ}也、人亦疑焉、何其劣也哉、
於乎、神可^{シテ}欺^ニ一人^ニ、而不^レ可^レ欺^ニ衆人^ニ、可^{シテ}欺^ニ
世^ニ、而不^レ可^レ欺^ニ後世^ニ、豈無^レ有^ニ其中^ニ、而長可^レ
飾^ル其外^ニ哉、豈無^レ有^ニ其美^ニ、而久可^レ為^ニ其名^ニ
哉、必有^{ズン}所以^ノ令^メ人信奉^シ之故^上也、睠^{ルニカ}吾邦上下渾
殺^{シテ}陷^{スル}溺^{スル}釈氏^ニ者、由來遠矣、神其無^レ意哉、時其不^レ
可^レ得焉、犯^ニ人主之怒^ニ、濟^ニ天下之溺^ニ、談何容易、
故以漸默^ニ消潛^シ奪^{シテ}其邪僻之氣^ニ、而欲^レ使^メ之^{ナラン}
皈^ニ至正之域^ニ乎、非耶、其若^ニ儒名^ニ何^ニ神必不^レ然、
齊王好^ニ貨色^ニ、孟子不^ニ直掃^ニ之、而先導^{ツク}之、魯人
為^ニ獵較^ニ、孔子不^ニ卒改^ニ之、而少^{シキ}同^フ之、於乎、神意
果^{シテ}在^ニ茲乎、姬^ニ且其亦不^レ可^レ學哉、彼^レ一^{〔B時〕}、此^レ一^レ
眈^{〔B時〕}、憂^ヘ君憂^フ民、雖^レ欲無^ニ不予^ニ色^ニ、不^レ可^レ得焉、是^レ
亦不^レ可^レ為^ニ非^ニ素行^ニ之學^ニ、宜^{ナル}矣人欽慕^{シテ}不^レ止矣、
復何^シ疑之有矣、南紀和歌浦置^ニ菅廟^ニ者、邇代尚矣、

今国主豊臣姓浅野氏幸長公、就^{〔B君〕}昨^{〔B D 昨〕}土之封^ニ五年、
 相^テ旧制之隘陋^ヲ、而於邑^{シテ}不^レ措焉、然神乏^{トモ}主^{フスヲ}、先
 成^{シテ}民、而後致^ニ於力神^{ヲニ}、鑿^ニ開兆域^ヲ、依^リ崖壁^ニ、疊^ム
 二鉅石^一、躋攀崢嶸^{タリ}、百工子如來、祠堂不^レ日^{〔B廟〕}以落^{シテアラテス}
 矣、刻画華彩、丹漆黝^{ヌリヌリヌリ}堊、延袤之宏壯、照^シ顏奪^ル
 目、昔狄梁公毀^ツ江淮淫祀一千七百区^一、所^ル存者惟夏
 禹、伍子胥二廟^{ナリ}、君子猶^ヲ以下^{ヘリル}為^ニ存^ニ伍子胥廟^一未^タ
 是^{ナラ}、国主之於^ニ此廟^一、可^レ毀乎、以新焉、可^レ廢乎、
 以崇焉、所^レ為^ル可^レ知而已、維時世道、^{〔D 世〕}甚矣、
 列国侯伯達官、唯有^テ佞^{スルコトヲ}、^{〔D 世〕}崇^ニ儒教^一者、^{〔D 世〕}彝倫攸^ル
 講張^{キテ}為^ニ幻^{スコトヲ}、而未^レ聞有^{ルコトヲ}、^{〔D 世〕}崇^ニ儒教^一者、^{〔D 世〕}彝倫攸^ル
 戮^ル是之懼^ル、偶因^テ衆人之信^{スルヲ}、此神^一之有^{ルニ}善名上、
 而作振^テ以^ニ充^{スルノ}其秉^{ルノ}彝之德、降衷之性^ヲ、不^ニ亦^ヤ建^一
 哉、賴^テ之^ニ士知^ル所^レ學、民得^{タリ}所^レ由、国主為^ニ之^一倡^{ハカフ}、
 則列国、嚮^イ風慕^フ化、有^レ如^{クナルコト}日矣、此拳豈淺
 淺哉、然則、今日神廟則他日聖廟也、今日国政則

他日天下之政治也、夫神之所^{〔D 道〕}學^フ之道、先聖之道也、
 所^レ欲^ル之教先聖之教也、於乎、神其道屈^{シテ}于昔日^ニ、而^ニ
 伸^フ于今日^ニ、其^ノ教晦^{シテ}于昔日^一、而顯^ル于今日^ニ、於^テ是^ニ
 神始得^テ為^レ神、神若有^レ知^ハ、則可^レ謂^ハ国主者千
 載之知己矣、^{〔A D 神其安焉、神其饗焉、於乎神千歲之精爽也、〕}
 何其幸也哉、初余庇^シ二国主之佳招^一、入^テ二国境^一縱^{マ、ニ}
 觀焉、徒缸舟梁、以得^ニ往還轉運之便^一、列^子樹以表^シ
 道、立^テ二鄙食^一以守^ル路、塘^{アリ}于池沼、陂^{アリ}于川沢、以^テ
 備^フ二水旱^一、民高^ニ其閑閤^ヲ、厚^ス其墻垣^ヲ、^{〔D 世〕}侍^{ソナヘテ}奮^ヲ揭^一、
 而無^シ懸耜^一、食^ミ力樂^ヲ生、含^ミ哺鼓^ヲ腹、熙熙然^{トシテ}以^テ
 安矣、暇^{ニハチニ}則講^ニ眾留^ヲ、設^ク二穿鄂^一、魚鼈禽獸不^レ可^ニ勝^テ
 用^一也、雖^レ不^ニ佃作^セ、而足^ヌ矣、況腴田之饒園圃之利^{ヲヤ}
 乎、千樹棗栗橘柚梨柿、千畝漆枲桑麻竹葦梔茜、千畦^ノ
 老芋母薑、衣食於^テ是^ニ乎生、^{〔D 櫨〕}〔D 櫨〕^{〔D 櫨〕}樟松栢檜杉、有^リ二周
 廻数十里之山^一也、材器於^テ是^ニ乎成、積雪百里之塩、惟
 金三品、銀及鉛與^レ汞、怪石綠青、財用^レ於是^ニ乎出、有^一

大洋一也、荒服異域之產、重寄象觀詠一而來貢、奇貨
於^レ是乎居、此皆所^二取給仰足^一也、可^レ謂天府國
也、^{カナ}嗟哉、秦徐福逃^レ難而投^レ化、明太祖題^レ詩而想
像矣、紀之^レ為^{コト}州、雖^{トモ}隣^{ルト}京畿^ニ、地迫^{レリ}南裔^ニ、嘗^テ
聞前世其民、恃^ミ嶮^リ幽^ニ、争^ニ捷於^レ獫狁^ニ、比^ス猛争於^レ
豺狼^一、狡猾暴悍不^レ可^ル測、有^レ事則枯木朽株、尽^{クニ}為^レ
難矣、守土者以^レ為^テ憂、而至^レ不^レ可^{トモス}奈何^一焉、今也吻
爽闇昧、得^テ耀^{コトヲ}乎光明^ニ、而化^{シテ}為^ニ樸魯質直^ノ之民^一、
想^{フニ}是^ハ教養兼施、刑賞並設、駕御之術有^レ在矣、由^テ是
見^レ之、敬^{スルノヲ}神之至誠、実出^{ニツ}聖教^ニ、若其托^{シテ}荒誕迂
僻、奇怪恍惚、卜祝禳禱之說^一、而扇^シ惑善良^ヲ者、得^ハ
逞^{スルコトヲ}其淫巧^ヲ、則有^{ルコト}狄公之手段^ニ、於乎、神
雖^{トモ}獨豐^{スト}、其何福之有矣、余適抵^ル和歌浦^ニ、浦之勝、
古今風人韻士、不^{セニ}絶口^{ルニ}、然^{ルニ}獨山部明人之歌^{ツクル}「^{ア載}」
乎万葉集、僉曰、雋永無^シ窮矣、先^キ是因^{リテ}歌而以知^{テリ}
斯地之絶景^一、今也因^テ地而以知^ル斯歌之警策^一、試高

歌數闋、不^レ覺此身遊^フ此地^ニ歟、此心在^ル此歌^ニ歟、
憑^リ欄繞^リ廊、逍遙徜徉^{タリ}矣、山之堰塞^{トシテ}長也、横或側、
円或尖、更斷復連、如^ハ咲^ニ、如^ハ睡^ニ、如^ハ延佇^ニ、如^ハ
俛仰^ニ、水之汪洋而遠也、如^ハ走、如^ハ逐、如^ハ遊、如^ハ
倒、如^ハ狂、似^ハ驚、似^ハ怒、地勢坼而島嶼出、潮声退^テ
而巖石高、飛鳥之為^{タル}聯翩^一、風破^リ烟、^跳躡魚之為^{タル}撥
刺^一、波碎^ク月、或^ハ一望千里、曙雲共^ニ遠帆^ト消、少頃多
時、犂牛載^テ寒鴉^ヲ過、遠淡近濃、雨抹晴粧、一日千態、
四序万状、不^レ可^{ニツ}具述^一矣、至若、人事絡繹、蘭烝椒
漿、迎^ヘ神送^{ルヲ}神、有^リ来集而祭者^一、山酒海物、上交^リ
下交、有^ニ相伴而遊者^一、携^ヘ幼、扶^ケ老、夫唱、婦隨^フ
主先奴從、漁者、樵者、耕牧者、商賈者、雜遝
盤桓矣、開^キ眼人之與^ト物、倫理炳焉、本無^{コト}隱^ニ百
姓之日用、知者之知、仁者之仁、先覺覺^シ之、後
覺亦覺^ス之。東西海之聖人同^シ之、南北海之聖人亦同^ス
之、是以八政得^レ用、五倫得^レ叙、四民安^ス業、是乃

神之歌詩也、文章^{〔BD也〕}、史論也、^{〔BD經義也〕}、命性道教也、
 豈外求哉、於乎、神孰^レ無^ニ此心^一、一撥転、一
 提醒、信^ニ其所^一可^レ信、益知^レ有^レ信、疑^ニ其所^一
 可^レ疑、終至無^レ疑、然後神人以和、是所以^ニ我敬^一神、
 所以而神助^一我歟、於乎、神以為^ニ何如^一、人其欽
 哉、国主属^ニ余書^一斯事、其辞曰、
 扱^テ海壖^一兮、封^ス神丘^一、廟貌嚴^ニ兮、遺^ス徽猷^一、名而
 実兮、人焉瘦^ソ、敷^イ教化^一兮、使^ニ民由^一、綿歴邈^ニ兮、
 涵^{セン}天休^一

二 解説―数本間の異同について―

藤原惺窩の「菅神廟碑文」は「惺窩文集」および「惺窩先生文集」に収録されている。「藤原惺窩集卷上解題」(『藤原惺窩集 卷上』所収)によると、「惺窩の文集は従来刊本二種あり、一は惺窩先生文集であり、他の

一は惺窩文集である」(七五頁)。前者は惺窩の曾孫藤原為経編、徳川光圀校、享保二年(一七一七)頃成立である。厳密には寛永二十一年頃校正作業が進められ、慶安四年(一六五一)後光明天皇の序文を得、寛文一年(一六六一)版行準備が整っていたが、火災にあつたとのことである。また、後者は林羅山編集、寛永四年(一六二七)刊行であると説明されている。厳密には、後者は、寛永四年に版行準備が完了したものの、事情により開版は遅れたが、寛永二十一年(一六四一)迄に開版したとのことである。そこで『藤原惺窩集 卷上』所収「惺窩文集」所載の藤原惺窩碑銘を碑銘A、「惺窩先生文集」所載の藤原惺窩碑銘を碑銘B、『関南天満宮伝記』所載の藤原惺窩碑銘を碑銘C、全長『和歌浦物語』所載の藤原惺窩碑銘を碑銘Dとして論を進める。なお、『藤原惺窩集 卷上』所収「惺窩先生文集」の底本は京大図書館本で、句読点のみで加訓なく、「惺

窩文集」の底本には句読点無く、訓のみがある。

さて、『関南天満宮伝記』所載碑銘Cの題名は、「重建和歌浦菅神廟碑銘ニ碑ノ銘」（送り仮名等は『関南天満宮伝記』の著者安田正俊が付したものであろう）となっているのに対し碑銘Bの題名は「重建和歌浦菅神廟碑銘并序」となっている。そこに注記されている「惺窩文集」所収の碑銘Aの題名には「并序」がなく、「重建和歌浦菅神廟碑銘」であることがわかる。このことから碑銘Cは碑銘Bではなく、碑銘A系本を基にして作成されたことが推測される。以下本文の異同を見ておこう。

※Lは碑銘Cの行数（先頭より）

碑銘A	碑銘B	碑銘C	碑銘D
斑斑	班班	斑斑(L 4)	班班
行位	行位	行(L 12)	行
奚後	奚後	奚(L 14)	奚

なし	為	為(L 27)	なし
行位	行	行(L 27)	行
公君	公	公(L 29)	公
祠廟	祠	祠(L 32)	祠
道学	学	学(L 45)	道
なし	載	なし(L 74)	なし

以上のように碑銘Cは碑銘Aと共通する点が多く、概ね碑銘A系本を基に作成したと推測される。とはいえ碑銘Aと異なる場合が二カ所あり、碑銘Bと同一の力所が二カ所ある。これらのことから、碑銘Aとは別の碑銘A系本が存在し、それを底本としたと考えられる。^⑦

『関南天満宮伝記』は卷末の年紀記載により寛文四年（一六六四）に著されたことが知られる。したがって、当時「重建和歌浦菅神廟碑銘」を掲載した「惺窩文集」はすでに版行されていた可能性もある。しかし

同伝記の巻末には「此一巻、古来流伝之事実、謹粗記之畢」とあり、「重建和歌浦菅神廟碑銘」の書写文等が当時天神社に存在した可能性もある。後者の場合も、その内容は碑銘A系伝本の内容と推測される。

このほか、碑銘Cと碑銘Bをよく比べてみると見ると、「神其安焉、神其饗焉、於乎神千歳之精爽也」（卷上L22）文章「や也」「経義や也、脱か」（卷上L45）が脱落していることがわかる。『伝記』を編集する際に起きた不注意によるものであろう。

ちなみに、全長が引用した碑銘Dは、全長がその典拠を「惺窩文集二卷二葉」であると明記しているように、「斑斑」を除いて「学」を「道」と誤記するなど、の事例を含め、忠実に書写した感がある。また加訓、送り仮名の付け方は碑銘Cとは相当大きく違っている。それぞれ独自に書写し、解釈したためであろう。

以上のように、引用されている「重建和歌浦菅神廟

碑銘」の近世前期（一六四〇年代）成り立ちから考察して、『関南天満宮伝記』は、紀年の寛文四年（一六六四）に同社で作成された可能性が高く、同社の由緒書としてきわめて貴重な資料であると理解される。

むすびにかえて

『藤原惺窩集 卷上』所収の「藤原惺窩略伝」によると、惺窩は慶長十一年（一六〇六）に浅野幸長の招きで紀州を訪れ、「重建和歌浦菅神廟碑銘」を起草した。そしてその後も親交があり、「避寒かたがた紀州へ出向いている」。碑銘執筆の年代は厳密には不詳である。しかし天神社が再建された直後と考えるのが適切であろう。和歌浦を訪れた惺窩は「紀州雜詠四首」の漢詩を作っている。その内の一つは次のようである。⁽⁸⁾

遊和歌浦

遨遊諸客海城傍。激濫水連彼蒼。出網跳魚新撥刺。

一聲欸乃逐斜陽。

惺窩らが海上で遨遊し、近くの漁民が魚を獲る姿を見て、感動したようすが表されている。この詩作は「重建和歌浦菅神廟碑銘」の後段「跳魚之為^{タル}撥刺」以下の表現に影響を与えていると見られる。

「海城傍」とは何を指しているのであろうか。雑賀崎辺りのことであろうか。和歌浦の漁民が水軍を形成していることを知っていた可能性がある（浅野幸長との会話で）。とすれば、都市民である惺窩はまず陽光の和歌浦で魚の恵みを獲る漁民を目の当たりにして感動し、さらにその上、長い期間の戦闘とこれを収める政治の論理（儒学）を考えていた時期、惺窩の思索と和歌浦の自然・生業が一体となり、碑銘の一行となったのでないかと考えられる。

ところで、この碑銘を刻んだ碑自体は建立されな

かった。近世前期林羅山が「有故不建碑云」と記している。⁽⁹⁾一八世紀中葉期の『和歌浦物語』では「一説に、当社は菅廟でなし」「豊国の霊をまつり、天神と号する」との説を紹介し、これを否定している。⁽¹⁰⁾一九世紀前期の『紀伊続風土記』では「故ありて建すといふ、或説ニ」「豊国明神を合せ祀りしなりといふ、今其事詳ならず」とある。⁽¹¹⁾これは羅山の詩をふまえていると見られるが、建立されなかったことが憶説を産んでいる。碑銘が建立されなかったことについては大桑斉が、惺窩自身「神儒一体の民政論」の未熟故に碑銘建立を放棄したためであり、浅野幸長との確執はないとの説を述べている。⁽¹²⁾豊国廟との説は大坂夏の陣後に流布したのではなからうか。

（翻字凡例）

一、漢字は概ね現行字体に改めた。

一、「𠬞」はシテ、「」はコト、「𠬞」はトモと記した。

一、熟語を繋ぐ線は省略した。

一、碑銘A B Dと異なる文字の場合、傍に「A」「B」「D」と注記した。ただし、正字俗字、返り点・訓点の違いは一切注記しない。

注

- (1) 「天満宮展」が和歌山大学と天満宮の両所で開催された。
- (2) 「近世初期和歌天神社考」『関南天満宮伝記』を中心に、「紀州経済史文化史研究所紀要27」(二〇〇六年十二月)、『同銘文は「惺窩文集」「惺窩先生文集」に収録されているが、国民精神文化研究所編『藤原惺窩集 卷上』(一九三九年三月)で翻刻されている。
- (3) 太田兵三郎(青丘)「藤原惺窩に就いて」、注(3)所収。
- (4) 大桑齊『日本近世の思想と仏教』(法蔵館、一九八九年刊)第四章三「菅神廟碑銘」二二七から二三三頁。
- (5) 柏原卓「翻字 紀州藩文庫蔵『和歌浦物語』」、『紀州経済史文化史研究所紀要10』一九九〇年三月(原本は写本。朱筆で訓点・返り点が記されている)。その後解説等を加えて『和歌浦物語』(和泉書院、一九九六年七月)として上梓された。
- (6) 「素行」を「素位」とし、「奚」を「後」、「公」を「君」、「祠」を「廟」する点で碑銘B系本は誤記がやや多いのではと考えられる。前掲「解題」ではB系本を掲載した「惺窩先生文集」の方が「大体に於いて」「信用すべきである」

と評価されているが、「重建和歌浦菅神廟碑銘」に限ってはそのような評価は当たらないようである。

- (8) 前掲注(3)の七四頁掲載。
- (9) 『林羅山詩集卷第三』所収「菅神廟」。同書の刊行は万治二年(一六五九)、『林羅山詩集 上巻』(ペリカン社刊、一九七九年)に採録。
- (10) 前掲注(4)、『紀州経済史文化史研究所紀要』第一〇号一二頁
- (11) 『紀伊続風土記』第一輯四九八頁。
- (12) 前掲注(5)二三二―二三三頁。